

天真爛漫

ミイラガール(仮)



『天真爛漫ミイラガール（仮）』
第2稿

大川祥吾

1 / 23

登場人物

由里子（26）：女優。事務所に所属し
ておりそこそこ舞台にも出演している

洋介（26）：百合子の幼馴染

恵（27）：百合子の1年先輩、洋介の
妻で妊娠3ヶ月目

母（55）：百合子の母、入院中

香織（51）：百合子の母の妹

木下先生（49）：百合子が高校時代に

演劇部の顧問だった女教師

佐伯（37）：芸能事務所マネージャー

女A（26）：百合子の同級生の女

女B（26）：百合子の同級生の女

2 / 23

○町の道路

歩く百合子（26）の顔アップ。
徐々にカメラが引くと、彼女が
全身を淡いピンク色の包帯でく
るぐる巻きなのがわかる。
人通りもそこそこの午後の街中
を、大きく真つ赤なスニーカー
スを引いて歩いている。
十センチ程のヒールや、あまり
派手では無いが、都会的な服装。
だがすれ違う人は、誰も彼女の
姿を気にして居ない。
スニーカーを引く音が響く。
「天真爛漫ミイラガール」

3 / 23

○駅前
の駐
車場

真つ赤なスニーカーが車のト
ランクに積まれ、閉めるとピン
ク色の包帯に身を包んだ由里子

が居る。乱暴な音に驚き、運転
席から洋介（26）が顔を出す。
洋介 「もつとソフトに閉めて！」
由里子 「だいじょーぶ（車を叩く）」

助手席には、落ち着いた印象の
女・恵（27）が座っていて優
しく微笑んでいる。

○走行中の車内

洋介が運転する車。後部座席に
は由里子、助手席には恵。
百合子の包帯には全く気にせず
会話している。

洋介 「じゃあ、なんか恨まれるよう
な事でもしたんじゃないの？」
百合子 「いや私してないと思うんだけ
どねー、ほんと意味わかんねえし、にし
てもやりすぎじゃない？」
洋介 「本番中のそのアドリブ？は悪

4 / 23

意あるかもだけど、台本捨てられたのは誰かわかんないんじゃないの？」

百合子 「いや絶対その女なんだって！ ああもう、またワナワナしてきた」

洋介 「へー（外を見て）ん、あれ：こっちで合ってたっけ？」

恵 「うん、え（振り返って）中央病院だよ？ 百合子のお母さん」

百合子 「あ、はい、そうです」

恵 「合ってるよ、まだ先」

洋介 「うい」

恵 「喜ぶんじゃない百合子のお母さん、会うの久しぶりなんでしょ？」

百合子 「はい、成人式以来なんで」

恵 「娘が川野町のスターだからね」

百合子 「んなこたないすよ！ 最近もうオーディションも落ちまくりで、若干恐怖症っすもん」

恵 「こないだCM見たよ、あの、

5/23

なんか、ダイエツトの？」

百合子 「いやあ、みんなで肉食べながら、ヘラヘラしてるだけですよー」

○中央病院・入口付近

百合子が車から降りて、車内の二人と話している。

洋介 「あ、わかった！」

百合子 「ん？なにが」

洋介 「そいつも例のエセプロデューサーの女だったんじゃないの？」

百合子 「は：：え？」

洋介 「そいつも奥さんの存在知らずに的なの？ だってその人がキャスティングしてたんでしょ：」

百合子 「ちよいちよいちよい！ え、洋介、お前なんて知ってたの？」

洋介 「：：あ」

百合子 「恵さん？ 言ったんすか」

6/23

恵 「いやあ、ほら、つい？」
百合子 「つい：え、どこまで？」
恵 「じゃあ私達、買い物してるから連絡ちょうだい」
百合子 「あ、はい、え、ちよ待っ」
二人の車が走り出す。

○ 中央病院・病室

ベッドには百合子の母（55）が寝ている。
母 「ゆり、いつまでいれるの？」
百合子 「んー来週がまだわかんないんだよね、仕事の連絡待ちで」
母 「そう（笑顔）」
母を見つめる百合子。
百合子 「じゃあ、そろそろ行くね、洋介達待ってるから」
母 「うん、ありがとね」
百合子 「明日は飲み会だけど、その後

7/23

でまた来るから」
母 「うん」
病室を出る百合子。ドアの後ろに香織（51）が待っていた。
香織 「ちよっと」

○ 中央病院・待合室

香織が見舞いの菓子折りを整理しながら、百合子と話している。
香織 「百合子ちゃんさ、こっち帰ってまた姉さんと暮らす気は無いの？」
百合子 「ないです」
香織 「そう、相変わらずね」
百合子 「次の舞台も決まってて、今また新しいCMも最終選考中なんです」
香織 「ふーん、私にはよくわかんないけど」
百合子 「香織叔母さんには迷惑かけますけど、お母さんも応援してるんで」

8/23

香織 「歳には勝てないわよ」

百合子 「そうですね」

香織 「転移が無かったから良いけど、もうこれからは、いづとうなるかわかんないんだし……」

百合子、黙る。

○ 走行中の車内（夕方）

後部座席にはベビー用品を購入した箱が積まれており、その横に百合子が座っている。

百合子 「ああ！だから嫌なんだよね」

洋介 「そら心配すんじゃないの」

百合子 「いや違うんだよ、うちのお母さんと仲悪いだけなんだって！」

洋介 「へー」

百合子 「ああ、もう！飲もう！」

恵 「明日だよ飲み会」

百合子 「ですよね、うん、あーあ、に

9 / 23

してもやっぱ早くね？これ（ベビー用品の箱を叩いて）

恵 「絶対早い」

洋介 「いやなに、善は急げ的な」

恵 「まだ男か女かもわかんないんだよ？（自分のお腹をさすりながら）」

百合子 「恵さんまだ今ならこんな男、解約した方が良いんじゃないですか？」

洋介 「はっはっは……あ、あれ、木下先生じゃね？」

二人、窓の外を見る。

○ 道路脇の歩道（夕方）

停められた車の中から三人と、元教師の女・木下先生（49）が話している。

木下先生 「元気そうね」

百合子 「それだけが取り柄なんで」

木下先生 「懐かしい、何年前かしら」

10 / 23

恵 「もう十年くらいですよ、先生にいつも怒られてたの」

洋介 「特に俺が」

百合子 「まだ指導してるんですか？」

木下先生 「もう学校も辞めちゃったのよ、今はね畑の手伝いに行ったりしてる」

百合子 「そっかー、あの頃は楽しかったなー」

恵 「あ、先生も来ます？明日、演劇部の連中も来るんで」

○百合子の実家・居間（夜）

暗い家にスーツケースを選び込み、居間の電気を付ける。

懐かしむように部屋を見渡す。

奥の仏壇の前に進んで座る。

百合子 「お父さんただいま」

仏壇には百合子の父の写真。

鞆からチラシを取り出す。

百合子 「これが次の舞台だよー」

○百合子の実家・部屋（夜）

百合子は部屋着に着替えていたが、相変わらずピンク色の包帯でぐるぐる巻になっている。ベッドの上で、学校のアルバムと昔の写真を眺めている。

そこへスマホに着信。画面を見ると少し慌てベッドの上に正座する。スマホを一度置き、軽く手を合わせ、お祈りをしてからゆっくりと電話に出る。

百合子 「もしもし」

電話の相手は佐伯（37）。

佐伯電話 「お疲れ様です佐伯です」

百合子 「お疲れ様です！」

佐伯電話 「来週月曜の撮影ですけど、チラシになりました……」

落ち込む百合子。

佐伯電話「明後日と来週の木曜日にまた
オーディション来まして出れますか？でき
れば直ぐ連絡欲しいって言われてて」

百合子「いや、あの私、親が入院した
んで今週いっぱい実家帰るって言った
じゃないですか」

佐伯電話「あ、そうでしたっけ、じゃあ
来週木曜日どうですか？」

淡々と話す佐伯に苛立つ百合子。

百合子「親の様子次第ですかね」

佐伯電話「わかりました、じゃあ判った
ら早めに連絡貰えますか？できれば直ぐ
に連絡欲しいって言われてて」

百合子「（キレながら）はい！」

○居酒屋・座敷

洋介、恵、百合子の他にも、同
年代の男女5〜6人で飲み会を

している。

百合子「絶対あの事務所辞めたる」

女A「それは無いね」

女B「絶対辞めた方がいいよ」

百合子「ほんつとありえない」

洋介「エセプロデューサーの話？」

百合子「お前、まじ殺すよ？」

女A「騙されたってやつ？」

百合子「え……、ちよいい何この話どこ
まで浸透してんの？」

女B「何の話？」

女A「いや、ゆりちゃんかね」

百合子「ちよいいちよいい！」

洋介「要するに役あげるって遊ばれ
たんだろ？」

百合子「お前、この……」

恵「はい！ちよつと注目！」

恵の横には木下先生。

木下先生「お邪魔じゃないかしら？」

恵「大丈夫ですって！」

一同、先生を迎え入れる。

X X X

時間経過。

トイレで鏡に映る自分を見てい

た百合子。席に戻ると、洋介が

木下先生の肩を揉んでいる。

洋介 「ほんっとその節はお世話にな

りました」

木下先生 「幸せそう良かったわ」

百合子 「いやあ、先生には怒られて

ばっかでしたよね」

女A & B 「ねー」

洋介 「お前そんなに怒られてない

じゃん！俺なんて酷かったんだから」

女A 「たしかにー」

木下先生 「えーそうかしら？」

洋介 「よっ！川野町のシンデレラ」

百合子 「やかましいわ」

洋介 「まあ人としての幸せは、俺の

方が一歩も二歩も先に手に入れてしまっ

た訳ではございませんが」

百合子 「ウジウジ相談聞いてあげた

じゃない！大体、私だって直ぐに結婚し

てやるわ！」

女B 「えー、ゆりちゃんどんな人が

タイプだっけ？」

百合子 「まずね、騙さない人」

洋介 「でしようね」

百合子 「でも、やっぱ安定した人がい

いかなー、別にお金持ちってわけじゃな

くて全然いいから！」

女A 「えーほんとにー？」

会話を聞いて微笑む木下先生。

○中央病院・入口

タクシーを降りて玄関に入って

いく百合子。相変わらず包帯に

巻かれている。

○中央病院・病室

百合子が部屋に入ると、中では香織が衣類の整理をしていた。

百合子 「あ、香織叔母さん」

香織 「ああ（暗い表情）」

百合子 「あれ、お母さんは？」

香織 「検査だって、なんかお昼の時

に急に具合悪くなったみたい」

百合子 「え？」

香織 「ただの副作用だからって看護師さん

も言ってたけど、どうだか」

百合子 「……」

香織 「ねえ百合子ちゃん、真剣に考

えてみない？姉さんだって、百合子ちゃ

んと居た方が絶対嬉しいに決まってる

じゃない」

病室の窓から風が入ってくる。

○中央病院・屋上

車椅子に座っている母と、それを押している百合子。

母 「ごめんね、折角来たのに」

百合子 「いよいよ全然」

母 「ちょっと気持ち悪くなっただけ

なんだけど、検査しないと駄目なん

だつてさ」

百合子 「……お母さん、私がこつち

帰ってきたら、嬉しい？」

振り返り百合子の顔を見る母。

じつと見つめる。

母 「そんな顔されてたら、嬉しく

ないな」

○百合子の実家・部屋（夜）

ベッドで寝ている百合子。スマホが鳴り、画面には「佐伯さん」の文字。電話を取らず、音が部屋に鳴り響いている。

○公園

恵がベンチに座っており、百合子は芝生の上でストレッチ。包帯は相変わらず巻かれている。

恵 「大変そうだね」

百合子 「自分で選んだ道なんで、もう少しだけ頑張ってみます！」

恵 「うん、応援してるよ」

百合子 「あざーっす！」

恵 「私達はずっと百合子の味方だから、どっちを選んでもいいからね」

百合子 深く頷く。

百合子 「うおー！」

芝生の上で転げ回る百合子。

恵 「（笑いながら）何してるの」
百合子 「感情を身体で表現」
恵 「（笑いつつ）そうだ、百合子まだ居るならさ、木下先生にも会いに行ってみれば？」

百合子 「ああ、そうですね！」

恵 「この前も少し話したけど、百合子の事心配してたみたいだよ」

百合子 「え、ほんとすか！」

恵 「高校の時はずっと先生付きつきりだったもんね」

百合子 「懐かしいなー」

恵 「電話番号聞いたから、連絡してみるよ」

○ぶどう畑

畑の中を歩く百合子。

木下先生の姿を見つめる。

百合子 「先生！」

木下先生「あ、百合子、悪いわねこんなところまで」

百合子「いえ！」

○ぶどう畑近くの民家・縁側

縁側に座る百合子と木下先生。

木下先生「自分で決めた道なら、いいんじゃない」

百合子「はい！もう少し頑張ってみます」

木下先生「……うん」

百合子「なんかちょっと最近ツイてない事多くて、空回りしてる感じだったんですけど、もう少し、自分らしく、やってみようと思います！」

百合子を真剣に見つめる木下先生。その視線に気付く百合子。

百合子「先生？」

木下先生「百合子さ」

百合子「はい」

木下先生「私は無理だと思う、百合子の実力じゃ」

百合子「え？」

木下先生「身に沁みたと思うけど、そんな甘い世界じゃないし、5年もしないうちに絶対に帰って来ると思うわ」

百合子「……」

木下先生「私が保証するわ、あなたの力はね、その程度なのよ」

言葉を失う百合子。

○木下先生宅（夕方）

帰ってきた木下先生。

鞆から百合子の舞台のチラシを

取り出し、引き出しへしまう。

引き出しの中には他にも映画の

チラシや新聞の切り抜きが数枚

だけ入っている。

百合子関連の新聞やチラシ。
それに触れ、眺める木下先生。

○土手の上の道（夕方）

歩いている百合子。相変わらず
包帯はぐるぐる巻き。

歩行速度は遅い。表情は真剣。

鞆からスマホを出し電話。

百合子 「佐伯さん、木曜のオーディ

ション、まだ間に合いますかね？やっぱ

出ようかなって思ってたまして……」

歩く足元のアップ。

スルスルと包帯が解けていく。

頭部の包帯も解けて、風になび

く。電話しながら歩く百合子の

姿。空へ飛んでいく包帯。

終わり